

第七章 二十世紀の美術

マティス
ピカソ
ルオー
ルソー
カンディンスキー
デュシャン
ダリ
ポロック
ジョーンズ
ウォーホル

二十世紀は諸学芸に純粹化の果ての同語反復が立ち現れた時代である。それは、神権や王権をはじめとする諸権威の完全失墜に由来している。

民主主義体制の普遍化は、神や王のためでない「美術のための美術」（＝純粹美術）の登場を促した。一部の社会主義国や軍国主義体制下では「社会のための美術」や「聖戦のための美術」が国家権威により奨励されたが、自由主義を標榜する資本主義体制下の学芸は、商業目的化するか自己目的化する以外なかった。そして商業美術は美術でなく商業であるという理由で、純粹美術の側から忌避された。

自己目的化による他要素混入の排撃は、表現内容の捨象（＝還元主義）にまで至った。具体的には抽象絵画やレディメード（工業製品に手を加えず呈示したもの）である。そこに顕れる「美術としての美術が美術である」という同語反復は、「美術とは何か」の答にはなりえず、論理的には意味をなさない。一方では写真の登場を契機とする純粹美術の帰結として、ついに芸術の無意味を露呈した「反芸術」（ダダ）は、言語学における同様の成果や、数学における不完全性定理、物理学における不確定性原理と呼応している。神権や王権が保証していた「意味」の喪失は、論理の世界における意味の喪失でもあったのだ。

二十世紀文明が体験した二度の世界大戦と核兵器の登場、さらには社会主義国への幻滅は、論理世界の自己崩壊を裏打ちした。前章で見た自覚的な「反・近代」の形を取らずとも、フランス革命時には信じられていた「ヒューマニズムと理性尊重の一致」は、内側から崩れ去った。すなわち、論理という権威も失墜した。

第二次大戦前二十世紀美術

二十世紀美術は、「表現主義（生）―反芸術（死）―抽象と超現実（死後）」というサイクルを三回繰り返している。第二次大戦前期はその一クール目である。

広義の表現主義は「生」のイメージでとらえるとわかりやすい。美術における「意味」は、表現にあるからである。一九〇五年、マティス、ヴラマンク、ドランらフォーヴィストは、外的世界の「生」の感情を強烈な明るい原色に置換した（色彩革命）。キルヒナーらドイツ表現主義者は、内的世界の情念を強烈な重たい原色で吐露した。

広義の反芸術は「死」のイメージでとらえるとわかりやすい。美術における「意味の喪失」である。ピカソ、ブラックらキュビストは、可視的世界を記号要素に分解した（形態革命）。その際起きた遠近法的空間の死は、コラージュ技法を可能とした。バッラら未来派の芸術家は、文明世界を賛美すると同時に、あらゆる既成の価値に死を突きつけた。第一次大戦時、デュシャンらダダイストは、コラージュから派生したレディメードによって表現の抹殺と芸術の否定を行った。

広義の抽象芸術と超現実主義は「死後」のイメージでとらえるとわかりやすい。第一次大戦前後、表現対象の喪失という「死」を甘受し、非対象絵画を現前させたのがカンディンスキー（主情的抽象）、モンドリアン（主知的抽象）、ドローネー（オルフィスム）、マレーヴィチ（絶対主義）らであった。戦間期にはデ・ステイルなどの「冷たい抽象」が「死」を見つめ続けた。反対に「死」から目をそらし、意識下や夢の世界に逃避したのが、ダリ、エルンストらシュルレアリストだった。これら「死」の凝視と逃避のはざまでは、個人的問題を追求したモディリアーニらエコール・ド・パリの画家たち、反対に社会主義リアリストのシャーン、素朴派ルソー、宗教画家ルオーらが、「死後」を口実に時代の多様性を顕現した。

第二次大戦は世界史の表舞台をヨーロッパからアメリカへと転回させた。二十世紀美術史の二クール目は米ソ対立を背景としたアメリカが主役である。

二度目の広義表現主義は、ポロック、ロスコ、デ・クーニングらの抽象表現主義だった。図と地の区別のない大画面は実存的意味をあらわしている。物質性と行為の「熱い抽象」は、ヨーロッパではアンフォルメル（非定形）として追求された。

二度目の広義反芸術は、ラウシェンバーク、ジョーンズらのネオ・ダダだった。再登場したカラーージュとレディメイドの無表情を、大量消費社会の卑俗な現実を重ねたのは、リキテンスタイン、ウォーホルらポップ・アーティストだった。ポップ・アートはイギリスで芽生え、フランスではイヴ・クラインらのヌーヴォー・レアリズムが空虚と卑俗を扱った。ドイツでは屈折を交え資本主義リアリズムと称していた。

二度目の広義抽象芸術は、ジャッドらのミニマリズムとコースーらのコンセプチュアリズムだった。前者が到達した最小限の単色立体はまるで棺桶、後者が到達した芸術の定義はまるで弔辞だった。フランスではシュポール／シュルファス（支持体／表面）、イタリアではアルテ・ポヴェラ（貧乏芸術）、日本ではもの派や概念派が現れた。二度目

の広義超現実主義は、薬物や禪に逃避したサイケデリック・アートやニューエイジ・アートだった。両者のはざまでは、オブ・アート、キネティック・アート、ランド・アート、パフォーマンス、スパー・リアリズムなどが多様性を顕現した。

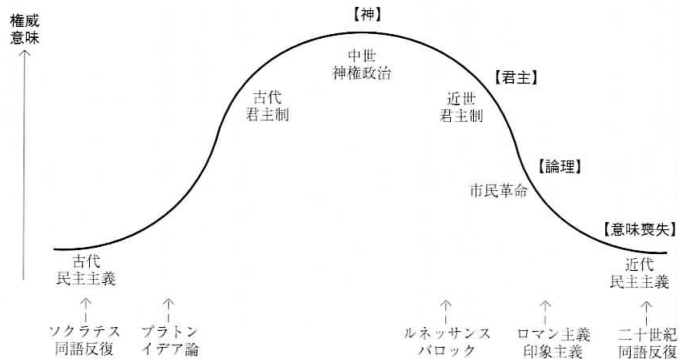
ポスト・モダン期 二十世紀美術

アメリカがソ連を脅威としなくなった一九八〇年前後から「ポスト・モダン」の時代認識のもと、三クール目が始まった。美術の「冷戦後」はベルリンの壁崩壊より十年早い。

三度目の表現主義は、キーフラー、ヘリングらの新表現主義だった。イタリアで脱前衛、フランスで自由具象派と呼ばれたように、伝統回帰、感情表現、幼児的退行などの要素を含んでいた。

三度目の反芸術は、ハリー、クーンズらのシミュレーションイズムだった。オリジナリティとアイデンティティが抹殺された。

三度目の抽象芸術はネオ・コンセプチュアリズム、三度目の超現実主義はヴァーチュアル・リアリズムやヒーリング・アートだった。両者のはざまではポリティカル・コレクトネス、センセーショナルイズム、グローバリズム、私的アートなどが多様性を顕現した。



	表現主義 (生)	反芸術 (死)	抽象と超現実 (死後)
第二次大戦前	フォーヴィスム ドイツ表現主義	キュビスム 未来派 ダダ	抽象……主情的・主知的抽象 絶対主義 オルフィスム ア・ステイル 超現実…シュルレアリスム 多様性…社会主義リアリズム 宗教画 エコール・ド・パリ 素朴派など
冷戦期	抽象表現主義 アンフォルメル	ネオ・ダダ ポップ・アート ヌーヴォー・レアリズム 資本主義リアリズム	抽象……ミニマリズム コンセプチュアリズム 超現実…サイケデリック・アート ニューエイジ・アート 多様性…ランド・アートなど
ポスト・モダン期	新表現主義	シミュレーションイズム	抽象……ネオ・コンセプチュアリズム 超現実…ヴァーチュアル・リアリズム ヒーリング・アート 多様性…ポリティカル・コレクトネス センセーショナルイズムなど